都風俗化粧傳　上

風字 一

ヲ 6
432
1

さ猶こし人乃座寶と
愛ゑまへし夜光は玉
必以集とこそ絶ゆ無きを
内積よ飛ろれしとや
世業れれしれしこ乃なき言に

津門 号 ヲ 532 巻 1

明治三十六年十一月五日
坪内雄蔵氏寄贈

しかも郷のゆかりこそなく
生立ありしともみえぬ身
よき伊達を帯してちごさへ
ありし風ハさ言ねハ以登
口おしきこと猶よりもまさりけり
あまりなむこそあれ都
風俗化粧待しいへる双紙
書写も物語ともまたて
すへての女ましまま秘能法を
まなひてよくよく作登し

さて又かたより四の大
とこ城も清き所に竹庵
見れハこ遠こ殊更月
おの清ら之流志やうの
探とも今に佐より外よ

清し見所々也と云所宮
所下りきまはそときも
様を尾と委し月哉
しま枝先れ之間とより
飛とも円とをこうし

豊後ぶしは古濃なりし
むらもや世双無うち
あらやかくめくおもひと
まゐらせめる老のひかと
今とて雲みはれて遊し
あるべき文化十年
冬月の末にかき年

大原権少将源朝臣重成卿

洋鷲主人

女子愛敬

都風俗化粧傳 巻之上目録

第壹 顔面之部 目録

○顔乃色を白くし光沢を出し肌膚をこまかにし美人にする薬の方

○鼻の低きを高く見する伝 并[illegible]伝

○目尻のさがりたるを上ケよふにする并睫をとくにつんする化粧の伝

○目の大なるを小さく見する伝

○頭書目録

○目の小なるを大きく見する伝

○眉毛と目のあひだ狭きを広く見する伝

○口の広きを狭く見する伝

○唇の厚きをうすく見する伝

○口の狭きを広く見する伝

○鼻筋を高く見する伝

○額のふくらかなるを細く見する伝

○面に出来たるしみを去る薬の伝

○面に出来る雀斑を治する薬の伝
○雀卵斑治する薬の伝
○黒子をとる薬の伝
○黒痣を治する薬の伝
○疣をとる薬の伝
○瘢風を治する薬の伝
○顔に出来る瘡痕を治する薬の伝
○腋臭を治する薬の伝
○手あれを治する薬の伝
○唇さけ痛むを治する薬の伝
○眼の病を治する薬の伝
○耳の痛みを治する薬の伝

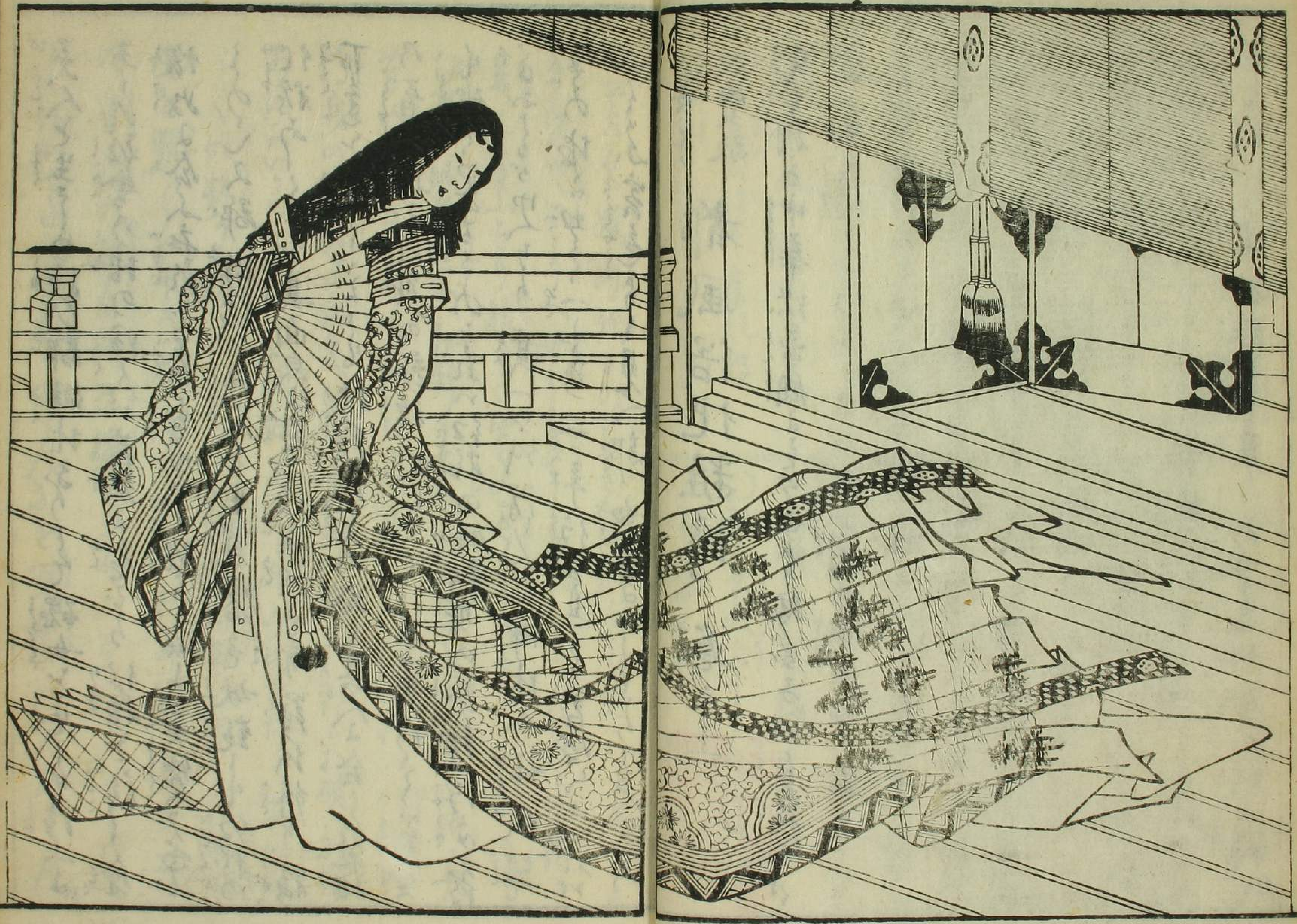
○頭に禿瘡出来るを治する薬の伝
○歯一切の病を治する薬の伝
○唇荒ひ唇のさけるを治する伝
○疥瘡のたゞれを治する伝
○髪のしらみを治する伝
○耳鳴并虫の耳に入たるを治する伝
○耳一切の病を治する法
○鼻一切の病を治する薬の伝
○口中の病を治する薬方
○倒睫にて目を治する薬の伝
○顔に悪瘡久しく癒ざるを治する
薬の方 二方

終

女子愛敬 都風俗化粧傳 巻之上

東京牛込區大久保餘丁町百拾貳番地 坪内雄藏

夫本朝は中華諸蛮国よりもすぐれて婦女子の貌揃ひて姿容天然とうつくしきは我神国の風土能く国に叶ひたる故なり。縷べきことに中にも就中の地は人の言語も優しく身躾の動静より眉造り紅粉の粧ひいとこまやかに優にしてあざむきことに奢る美質と謂べし。中にも京都の地は婦女子の容貌自ら紅粉の色彩厚く粧ひて嬋娟たり。かゝる容貌花麗とうるはしきのみならず紅粉の紅粧巧みなれば田舎より都へ出て都風俗となりて貴家にも交はり或は主人の寵愛…小児の時より出て風土を移りありとも都会の地に混りて



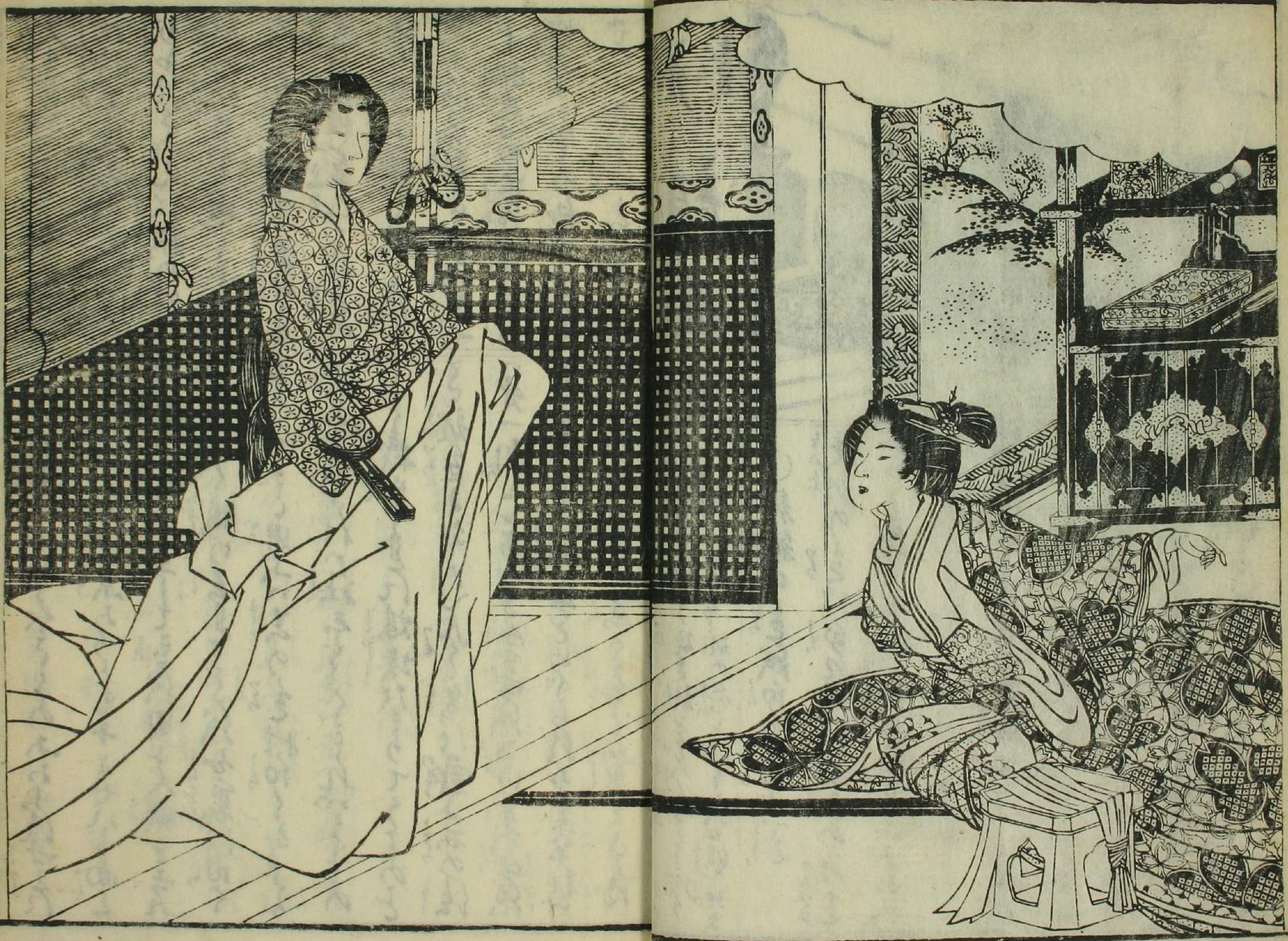
美人を生しめ給ひ鄙俚なりとて醜女を生しめ給ふに
あらねば都會の地の婦人は其気に応じて化粧を施し衣
恰好よく合ふ衣服を着るが故に醜き女も美貌に見ゆる
そのうへ鄙俚の婦人は生質容色妖艶にして紅粉の
化粧なくして其面貌に応ぜし衣服に綺羅を飾り粧
而容色を貴しとなすも模様地色の好み其人に合ひし衣服
の着様拵へたる所の動静はさまでしきが中へ入りて寛質
も醜く見ゆるものなれば紅粉の粧飾所の動静巧みなる
事なるが中なり　其一つは謂ゆる僻壌の婦人都と
平日の地に出で一とせ二年住居すれば古今くらぶれば
ふところ容色もよく見へ都女郎にかはらしく人ごとく
て蒙昧嫁娘はそのまゝ無縄にてしらぬことなる
立所出世する人世に多しこれ都へ出てより僻き
鄙のことなりと雖しき皆のもふなりけることはなきぞ
紅粉の粧飾宮の動静にて卑き鼻を高く見せ殊の外
背は長く見ゆる傳と知るが故なり　此は粧飾は紅粉の
作所の動静の秘要と儀式に出れば醜き容
あるひはいかにもあしき姿態あるときも其書をよくよく其法の
ごとく粧ひ施したるときは絳唇白歯をもつて紅瞼明
珠と呼ばし翠翠乃眉緑く鬢は雲の鬟儀まで花
の容月の貌百媚百嬌をそなへ美人となるなり
し得のことに変るあんふを見よ女子の見あらん

第壹 顔面之部

顔は面部の色を白くする薬の作り方顔を美しくする作り方其外顔の疵を治する薬の法を記す

○顔の色を白くする薬方
凡顔の色の白きは婦女子の第一の美なり
なりといへども鮮に白きは十人が中に五六人
あるにあらず多く黒く又は赤く
黄なる人あり是気血皮膚をめぐる
この所にして血が足らぬ故に
面に顕れ色艶の生じて皮膚
乃ち白からず洗ひ粉を用ゐると
いへども切る所もいでて白く瑩滝が

かるがゆゑ其例に圖式して作り方委しく記し
其能色を白くし肌膚の密理をこまやかにして尤も
艶を出し顔に生ずる所の腫物を治する薬の法より婦人の
其顔に嗜むべきの伝授にいたるまでことごとく是をしるし
是れば實に婦女子の為にする千金にも換がたき秘
蔵の書にしてよろしく選ぶべきのみなるべし



人生まれて三十二相揃ふる美人といふ迄て、おほくはその化粧の法、顔の作りやうによりて美人となるべし。其中にも色の白きを第一とす。色白きは七難かくすと諺に云ふがごとく、色の白きは第一なり。肌膚の皮理は瑩白如玉なる顔の秘方を記し、第一は粉を以て面を白くし、

肌膚の皮理を瑩白如玉に白くする薬の秘方を第一ヶ条として、次に面を白くし、顔の艶へおしろい、目又鼻、額口もと眉毛の作りやう又並に秘伝を述るとのべ出して、西施楊貴妃の美人も二人ともならぬ美人となる事を載て

○面に生ずる粉刺を治する薬の伝

よく顔色しろくなるべきものなれども世に少く、色の白からぬ薬あれども十が七八ハ面を害する事ありて、是は臓の人臓と云、臓の毒と云ふ事なり。五臓の裏に向くなりて男女の色の白からぬハ、これは見て出の白からず、されば肌をもつて洗ふ事ありて鼻の頭を清く、顔色の黒く面へ載する所の法ハ第一面を白く、鮮血をめぐらし悪血を去るもの、なるべく赤く黒く青く黄なるを

顔色なりとも忽ち面の色白く艶麗なる面の如く光沢を生ずる神妙の法を撰挙する方の悪血を去り、面上の疱瘡子瘤の類をも其一切の腫物を治するの識として知るべし

○色を白くする薬の伝

妍国白瑩膏と名く。此方は第一悪血を去り、鮮血をめぐらし、肌を細かにし、顔色を美しくし、此薬用ゆる時は忽ち白玉のごとく肌膚の皮理細かに、顔一切の腫物を治す

かんふん 官粉 十匁

みつだそう 密陀僧 二匁

すべりひゆ　馬歯莧

みちくさんじはつひ

てうし

○雀斑を流す薬の傳

白むめ　白梅

ゆすらえだ　櫻桃枝

うきくさ　浮萍

小さいかく　小皂角

細末して絹ぶくろに入

一月ばかりあらへば去る

○顔をあらふ薬の傳

はくだん　白檀　二匁

けいふん　軽粉　五匁

はまぐりこ　蛤粉　五匁

右細末にして卵の白身にてときあはせ

ねりて顔にぬり置あさ洗ひ落すべし

○色白くして光沢を出す薬の傳

楊貴妃秘方肉色瑤庵散と名付く楊貴妃

常に此薬を用ひて美人の名をとりたる奇法

くわうぎそう　密陀僧

卵の粉して水にてといて入湯気をして毎夜顔に

ぬり翌朝洗ひおとしすれば肉色を白うするのみならず文…

俄に児戯に戯れ遊びに化粧するは

男子に別して面に賦あるのみ

なれば白ろい落つくにむつかしくて

きしりて化粧するをのみ化粧

する也此薬を面にぬり一夜を経

て翌朝あらひおとして化粧すれば

よく化粧して面に白粉のるなりよく

おしろいのびて落付くこともなきを向く

ともなる奇妙の法なり

○色を白くし光沢を出す薬の傳

孫仙女粉と名付く孫夫人とふる

いちごのみ　苺實
菜のしるのやうにして
とりて毎夜ねるときに顔
にぬるべし奇功の法なり

○又法
くはの木のえだ　桒枝
をきざみて水にて煎じつめおき
ねるにぬるべしよく去る妙なり

○又法
やくもさう　益母艸
やきてもちゆべし
ゑいでら石　瞑女象石

右等分にして粉にしごまの油
にてとき付てよし

○黒痣を治す傳
おのし　藜蘆　不裁よろし料なり
黒焼にして灰水と大
茶碗に一ぱい銅の器
中にて湯煎して膏
のごとく煮つめ針にて痣
をとり○切破り此薬を付
べし二三度にて悉く治る
濃水の川あがるべし

仙女湯の法を用ひ数年の行ひをなせし女
のごとく優れてありし仙法なり
わうばくひ　黄蘗皮　どくわこん　土瓜根
なつめ　棗　七ツ
右三味とりて膏のごとくにし朝起る
とき湯にて面をあらへば廿日ばかりにて
色を白くし肌膚の荒理をとるゝ女
女のごとくなる誠に仙伝の秘方也

○同傳
かもうり　冬瓜　一ツ
細に切て酒壹升の中へ入火文火にて
もくり紙薬つめて膏のごとくにし布にて
こして澤を去り煉る事これを
よめり其朝あらひ顔をぬるべし二七日を
経て色白くなること実に奇功とぞ
しるしのよし

○色紙白くする薬の傳
西施白玉膏と名く居士の美人西施
常に此薬を用ひて天下に双びなき美人
と称せし奇方なり
あづき　小豆　五合　すべりひゆ　滑石　一文
びやくだん　白檀　一両

○又法
青とんぼう　蜻蛉
すりつぶし其汁を付べし

○又法
六月に扇紙よりて黒焼
にし細末し砥石と右
とを白粉にまぜこれを艶
に入水紙をさらに入その
内へ緑青を入置く日々
手をもて竈のあたりに
置て湿り紙にて米の

右紙にて磨きて痛み瘢く常に面を
洗ふもの面にてとこ又行水のときそれ
にて磨きめりつけて洗ふべし
○色紙印し細紙にて粉をつけて黒衣を
出で面のごとくなしむる米の傳
西施白雪散とて名けよく面の氣血衰
めぐらし鮮血を潤し顔色紙のごとし
細膚の宮紙にてすりおとしよれば光度を
出し面を洗ひ瘢を生ずる事なし

ちよぎく　猪求　九文
びやくぢゆつ　白朮　四文

とろけるほど竹の筒にて
炙紙にてそそげ皿を出し
其上に白粉紙にて御手と
ならして付るべしと
日々の奇妙し

○又法
竹の切口ぶしなりたる
水気ある水をへしきれず
其水にて炙とをし
その所を紙開元通宝の
錢古錢をあぶり炙焼

せうひ　青皮　二文
かんせう　甘松　七文
ちやうかう　白丁香　一文
しやにん　砂仁　二文
さんな　三奈　三文
しやくづ　赤豆　廿文
ひそうしやく　皂角皮　三分
さいかちの木の皮也
右九味水にひたして後火にかけて乾
かして種を去り粉にして篩にかけ
めりがすりにして色紙にて細膚の
宮紙にて手くすりする妙法なし

の毛むかしにやきてつけ
その後へ天花粉ふるひ
とぶしこすりおとしてさへ
きれいなるべし毒あり上唇
良法なり

○疵とる伝

いしばい　石灰

酒を五日ひたし日にほして
粉とし是を酒にてとき
疵の上に付るなり

○又其の方

艾にて疵の上紙三炷
灸すべし
又紙を小さく切て疵の大きさに
切り紙をおんぼりの
ごとくして其上に火を付
やくべし是紙やけかへるまで
よらふべし

○又法

いしばい　石灰

右をあいさの具をいれまず
小さき茶碗の内へ貝を

○艶紙白くし老たる紙嫩し美人と
なる素の伝

化粧殿秘方嫩容七香散といふ方
は我が朝の例宝年中より始まりて
容色を艶ひ損ずる故君の寵愛を
とらぬ秘方を匂ひ深法薮密の名傳あり
作る顔色艶よし老たる紙を和らぐる
良法とその上傳ひしなり名傳七箇目
合紙調し密法と称し合紙の出所と
いの今紙より仕法を傳わりて是紙授け
まじわり今に顔の肉落ち色青く憔悴

入れ顔色をなおし嫩く一雅なるのみなら
ずきび艶と潤ひし奇法なり

あさがほのたね　牽牛子　一匁

さうかく　皂角　一匁

てんくわふん　天花粉　一両

れいりやうかう　零陵香　一両

かんしやう　甘松　一両

びやくし　白芷　一両

右六味細末にし粉にして絹に包み
面を洗ふときは水にてとき朝夕面にぬり
よくもみこむべし又手足へもよく塗るべし

いふ。又緑豆を十粒程
さつと湯にひたしてかはをさり
なきすりの釜に中に入
へ見しのごとく蓋をおし
三月ばかりおきて緑豆醤
て米を露のあがりをやらじ
ろさんをとりて
顔のくせ二三滴付置
よくし痛も佳の妙なく
べにも顔色つやゝかなく
むらく痛む所は顔の毛生
もうく

たゞ顔の肉皮膚の肉をしまらせ色白く
憔悴たる顔色をうるほしてもやらにて
うるおし美しくするの法なり
○色を白玉の如くにし肌膚の密理
をこまかにしそばかすを治す薬の伝
玉面天上粉と名く

ぶんどう　菉豆　五合
かつせき　滑石　一両
びやくぶし　白附子　一両
びやくだん　白檀　一両
びやくし　白芷　一両

かんしやう　甘松　一両
しやうのう　樟脳　二匁
右七味よく粉にして篩ひて常に
顔を洗ふ時顔をよくあらひて後に水
のしたる肌膚をぬらして洗へば密理を
こまかにし皺かすを治しきめ
を治してうるほし
○色を白くする伝
まづ白水　米をとぎたる水なり
鉢に入なめをとげば米のしるの沈みたる
うは水を捨て残りたるをふるひ

○又法
杉楊枝して疵をなでゝその
やうじを黒やきにして
やうじのかはりにはかうやうけ ちやうんそのやうあり
粉にして掬で
麻の油にてとかし疵に付べし

○又法
もくべつし 木鼈子
をすりて疵を能くとれば
おちるし

○又法
有馬温泉
ありまのおんせんの湯
にてあらへば自然と
なほる也

○又法
蘿摩
かゞいものつるをきれば 此法ハ疵の二ツ三ツできたるによし
白き汁出る此汁紙
にひたし付べし

○黒痣を治る傳
あはせど 合砥
とぎおとしたる水の
きはめてよき也
ごしゆ 呉茱萸
はらや 軽粉

茶のけを布にて漉ひにかけ数度
めりて麻絲にて網をこしらへ ひとへしみ物を
漉すべし この薬を能しらべて これを洗ひ落せ
ば色を白くするの白玉のごとしと法式
人の處女は生質色黒きを歎きて
不秘をいふ此法をつたへ用ひしかば忽ち
色を白くして好美人となりたる
奇法なし

○色を白くし肌を細くし美人となる傳
からすうりの根 土瓜根
細末し清水ととき これを面にぬり寝て

して後清水をとりて洗ひ落すを
また晩ぬれば十七日にして色白く
なりぬ 面を色白くして美人となる
清水の中へ茶を入てかきまぜ其
座にもちひる時よく紙をもちひるまでとるべし
なりけり

○色白し肌の光沢を出し難を
の一生年て見ゑる事多の傳
先顔を洗ひて後紙合せ手十遍ほど晝を
合せる手の拳の心の熱くなる
ころにて拳にてよく顔を磨てよし

粟粉まぜて酸漿草
の汁にてとき湯にてよく
よく垢を落し此美艶
まづ付薬にして洗ひ落
まへの歳びもとも付べし

○又法

青ぐすく　胡椒

よくふ切まぜ其切口を
まづ其七日もとべし流る
ともぬたる

○又法

おしろい　白粉　五匁
いわう　硫黄　三匁

粉にし鶏卵の白みにてとく
ねりて付べし奇法なり

○又法

おうわう　雄黄　五匁
いわう　硫黄　五匁
わうたん　黄丹　三匁
てんなんしやう　天南星　三匁
みつだそう　密陀僧　二匁
みやうばん　明礬　二匁

それより鼻の両わき又頬口のまわり其
ほかのところも細く芥子に切十文字と
よくおでまり其後両目の瞼をとゞて耳の
あたりより耳ぎはよくくともすりつけ
かくれども目くれにてしりふくとも付る面の
紫血あまり悪血をとり鮮血ぬぐひ
血紙印し光沢を出し皺を生ざる
なく面まで一切の傷病を生ぜず眼を
明らかにし耳ばさるとも此法五年
経ればへば顔貌の色わかし少女のごとく
にわかり若をとめへして嫩[illegible]

めなり修して志も此法ますして其後
の大なるにして肌ぬめく切る秘法之

○皺紙のびし光沢よれ顔まとる倍

ちよてい　大猪蹄　猪のしのつめ之

細末にしまず細かにしてゝる
白水にて煮洗め青れぐく[illegible]附
顔をあらひ明朝まで向なくふぶじ
半月の後顔の皺よくのびきめ細か
にて若やかなること少女のごとし

○鼻の低きところ高く見する傳

鼻を顔の中にても中央にあって第一

しやうがのしぼり汁に
ひたし置、癜風(なまづ)ところへ
ひたし此薬をぬりおけば後(のち)
すこし黒く沢(つや)なくなり又(また)
ぬればよく治(ぢ)すなり

○白癜風(しろなまづ)を治(ぢ)する伝(でん)

まつけい　肉桂　一匁
たんばん　丹礬　一匁
けいふん　軽粉　一匁
いわう　硫黄　二匁

右こまかに粉(こ)にして莧(ひゆ)の

人(ひと)の目(め)に付(つ)くものなれば鼻筋(はなすぢ)よくとほり
うつくしからぬ鼻(はな)低(ひく)き人のうつくしからぬ
筋(すぢ)通(とほ)りて見ゆるやうにする仕様(しやう)まづ
低(ひく)き鼻は筋通(すぢとほ)りてよく見ゆる物(もの)なく
化粧(けしやう)のしやうは眉毛(まゆげ)と目(め)の中(なか)ほどより
はなの頭(かしら)へかけて白粉(おしろい)をおとしつけ少(すこ)し
こいめにし鼻の両(りやう)わきへうすくぬり鼻(び)
ばかり筋(すぢ)を寄(よ)せて見ゆるが肝要(かんよう)なり
鼻筋(はなすぢ)高(たか)くして見ゆれば低(ひく)きも自(おのづか)ら
らうたく見ゆるものなり

白根と五六寸ほどに一すぢに
切(きり)て一寸ぐらゐにまた切(きり)
一夜(や)ばかり水に浸(ひた)し
粉薬(こぐすり)をぬりてすり付(つく)る
なりいかほど治(ぢ)しがたきも
かならず此薬にてよく
治(ぢ)する奇法(きはう)なり

○又法

へびのぬけがら　蛇脱皮
黒焼(くろやき)にしてこまかにし
やきて灰(はい)にし酢(す)にてねりてぬる
べし

○頬(ほ)の皺(しわ)をかくす伝(でん)

鼻(はな)の低(ひく)きを高(たか)く見(み)する伝(でん)

はなの上の額(ひたひ)の化粧(けはひ)より
おしろいをこくぬるべし

はなの両(りやう)わき
ぬりてうすく
おしろいを
うすく
ぬるべし

はなのわきあたりも
……このごとく少し
おしろいを少しうすく
ぬりて両方(りやう)より白粉(おしろい)を薄(うす)くなるやうにぬるべし

○眉(まゆ)はふとく濃(こ)くつくるがよし

○紅(べに)はうすくつくべし

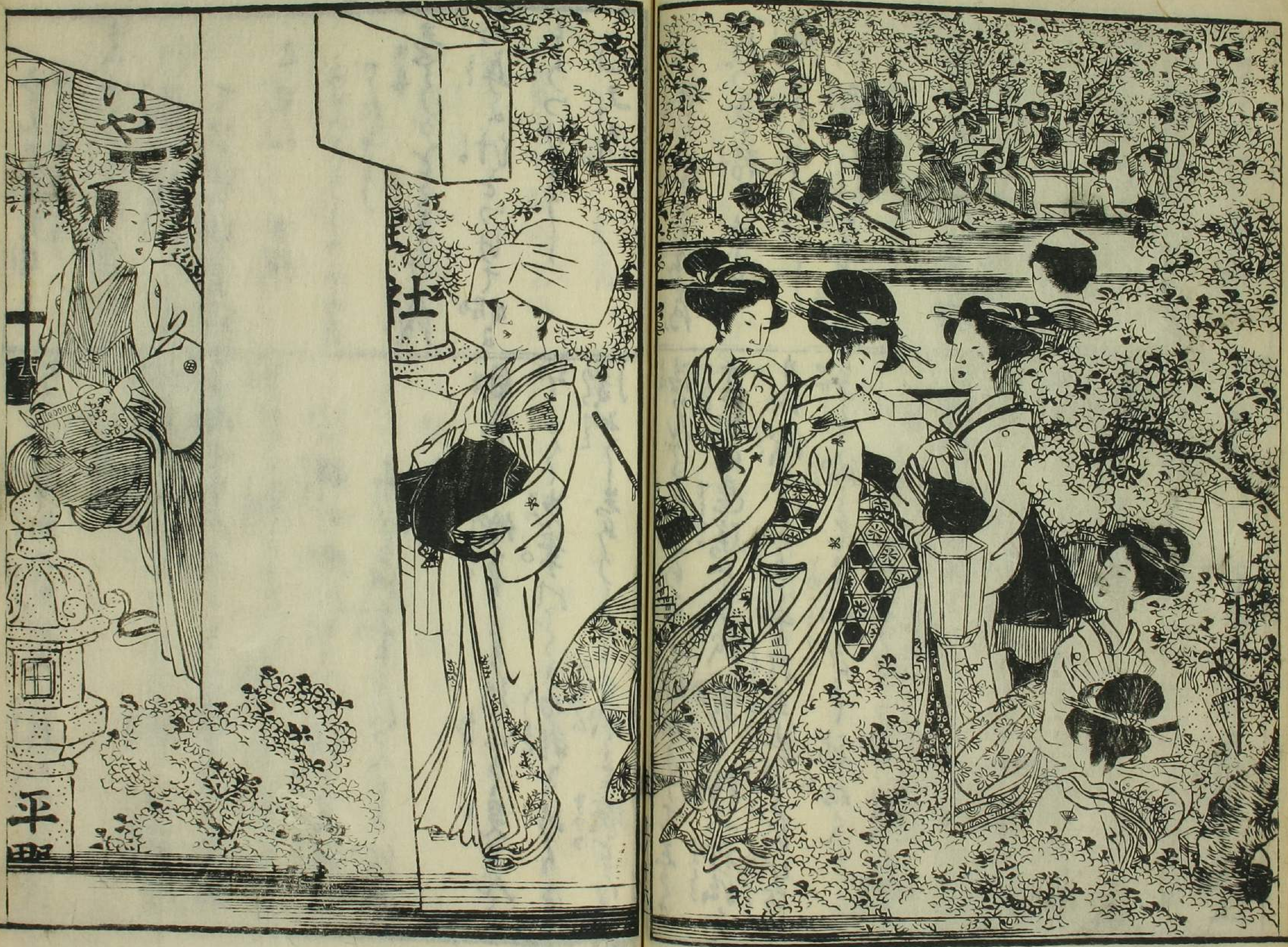
○はなのすぢは鼻(はな)へかけ
うすくぬるがよし

瘧を治る妙の伝
ごま 胡麻
嚼くだきて付べし
○又法
もくさ 艾
酢にてせんじつめて付べし
○面に擦やぶり疵付たるを治る妙の伝
しやうが 生姜
しぼり汁に出し其汁を
てら熱をとりて付べし

○腫たるを治る伝
あづき 赤小豆
粉にしてぬるべし
○耳だれ汁出るを治る伝
ぶくりうかん 伏龍肝
かまどのかれ底の土のやけつちなり
こまかにふるひて耳へ入日
ふるわたにてぬるべし
○唇さけいたむを治る伝
せいひ 青皮

○同じく鼻血をとむる呪の伝
世間男と女ともしらする人あり或ハ其法を
しらずして人のあしくよく其験ある然
信じ法を失ひ其法も後に法
此おこなふ所の気の勤ハ法と納
おほくかやうにと取り揃る人事ハし先呪の
法を深く秘しの神法をして其呪ハ人を
行の者にあらずしてみだりに授る事を
語の著きハ浅智元夫のなしがたし
ことのむつかしきハ其部の唐土ハ神霊
にも掛かわりて其みな君命をいとそ称ひ

毒をしてあまたの下に神秘をとりて志りよと
其所の速読みに少くしてこれが神法ハ
もしおこなひ得たる時ハちから正しくば
差しつかへて其切りたる神秘
いしや
診すべしとそのまゝ今のきまりとて
在所静め其心たりとも
まこのの法おこる方を思へあつけ右の手に
母指とさし指とをもてかくし
鼻の両眉の中央のあたりをなでゝ
るさきまでよりて行ぐ事を
てりむし指をそれが鼻もとより


や
社
平

みかんの青（あを）き皮を焼（やき）て
くろやきにしたり
くろやきにして付（つけ）てよし
○暴（にはか）に眼（め）赤（あか）くなり
てはれいたむを治（ぢ）する薬方
こせん　古銭
あかゞねにてはなく小かね
ぜんなり
生姜（しやうが）をこそげ去（こきん）
其（そ）の身に汁（しる）をつけて眼（め）に
ぬりつけてよし
○又法

ならず青梅（きめう）の兜（まぶた）ゆめく顔（かほ）の色あしく見ゆ
○又法
紙鼻（こより）の両方をとへさし指（ゆび）中指（なかゆび）にて
両眉（まゆ）のあひだより小鼻（こばな）まへにそへて押（おし）
下（さげ）て額（ひたひ）をそれば自（おのづ）から色（いろ）よくなるなり
○眸（まぶた）の懸（かゝ）れあかるき紙上（あげ）又眸（まぶた）の
ようる紙まへくにてんとる紅粉（けしやう）
乃方
目（き）ぶりの懸（かゝ）れからく紙よくて見せんと
おもしろく先（まづ）第（だい）よく白粉（おしろい）をめりてく
後（のち）に志やうりより手拭（てぬぐひ）にて瞼（まぶた）をふきて

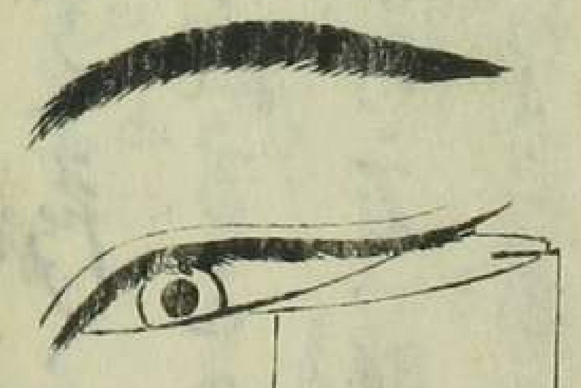
とうふ　豆腐
汐貫（しほぬき）して眼（め）の上（うへ）にの
せおきてよし
○涙（なみだ）多く出（いづ）るを治（ぢ）る方
志お　塩
つるふはらふしやく
眼（め）によくつけ治（あら）ひて
洗（あら）ふてよし
○眼（め）赤（あか）く涙（なみだ）多く出（いづ）るを治る方

目（め）ぶり紙上（うへ）の方へ少しぬぐひ其（その）はしく
紅紙（べに）にて薄（うす）く肉色（にくいろ）にのぼらざるよう
し目（め）ぶり紙方上の所へつけてぬるく
又瞼（まぶた）の下（しも）の方は瞼（まぶた）へつけて白粉（おしろい）をぬ
るべしあしくは図（づ）を見て知るべし
○眸（まぶた）さがりたる顔（かほ）の眉（まゆ）はつくりやうは一（ひと）と
おそく作（つく）り眉（まゆ）ぶりはおしく上（うへ）へとをめ
小作（つく）りにし引（ひき）込みてんのまうめく
○眸（まぶた）のしまりて紙（す）まへにまんきる紅粉（けしやう）
のしやうは紅をさして後（のち）瞼（まぶた）より目
ぶりのうへまでくにまあらぐる

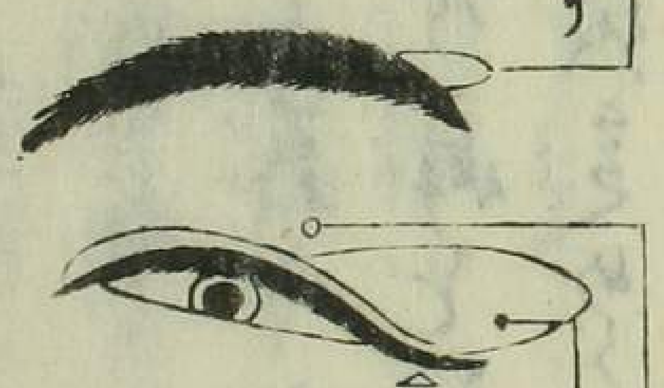
女のちゝ　乳汁
をとりつけてよし
○耳の霜やけを治する
薬の傳
しやうが　生薑
をおろして汁をしぼり
たびたび付べし治する
こと妙なり

手ぬぐひまたはのごひ様はうすき紅
紅紙おんのり其上へうすくつけ置べ
し上瞼へうけくおしろいをぬりこめ
置べし眉を少し作るが肝要なれ
あり様は此図を見て知るべし

まぶたの
上りたるを
画きまる
よし



○まぶたのうへ紅上て
見せるよし



○まぶたの下目は絵の分はさらにだんだん
うすくなるべしまべて紅はうすくて
手ぬぐひにて拭べし

○乾癬(たむし)にて出来たる物
乾癬を治す薬の傳
又ず　巴豆
炭火にてあぶり油をしぼり
出して湿しつけてよし
まりつけてよし
○又法
まづりひめ　馬歯莧
まりつけてよし
○はく呪の傳
小刀のさきにてたむしの
上へ畫べし
賦 —此点は本よりかくべし
の字をかきて此の下の
点にかへ〇下れ点は生ず
る本へ折てかくべし
其小刀を其木へさし
をくべしかくし其後
うけて流れるしその
湿小刀をぬぐふべし

○目の大なるは小さく見せる傳
眼は面の中央にありて面の臨ぬと
ころ第一のこれなればつねんとつよくし
かるし御見ともあまり大きさする
ものはしまれに細さ眼はせんかこそ
目は挟めきんどなれば瞼が眥皺こ
て世にいふ薮にらみといふ目付なり
都て眼の癖となりてあるん　まゝあり　是
眼は瞳は左めく見るが眼の用なれ
ば容易直らずかしたらんとも此法を
常に心得ば世のつくり目ども瞳と
は治るるものゝ其傳は我が面へむかうにて
晴なる所にて目はうちを流して鏡に入れ
て鏡見下すべし
目は大きく見ゆる時は鏡の目より
むかへて一寸ほどとるべし　まつ
る時は鏡はよきまで遠きほど鏡の目と
みる方の鏡は下に
額のびるとれば自のづから瞼ありて目は
おそく見ゆるといふものゝ中にてられ
湿よりはなれ面の眉目よく兼ねて
目となるものゝ是大なるが小さくなり

○頭に禿瘡の出来たるを治す法
ねぎの白根をすりつぶし　葱
ようせんじ其汁にて
あらひてよく乾し胡麻
の油をつけてよし
○顔に何にても出来物
腫物の出来たるを治す
薬の法
やなぎの木　柳

くろふハおしつけもりて後にかけて
たるものに封じて置べき時ハ瞼にも付
付べし
○又化粧のしやうにて瞼の両脇と眉
ぬり目の中へも少しあいの入るごとくに
化粧すべきなり
○又目の細きにて瞼の化粧を濃く
すれバ却て眼のうち目立て見え
ば眉のごとく化粧しはらめ白粉を
うすくして瞼お骨をはぶきぬくひ
生臙脂をいろいろくらくさしたるべし

塩少し入れて煎じ洗ひ
あらふべし治する也
○唇荒れ皺のさける
と治す薬の法
冬月寒気にあたり唇
のさけて唇をぬるとき
あるひは皺のさけるもあり
又夜の寝ぬさに唇も唇
かれ血出ることもあり
これを治するは
とうにん　桃仁

一様に見えて目の大きなる化粧とよく
此二條を人の新しきなりて
見え方を用ひ給ふべし
○眼の小さきを常にしたる目尻の紅

目の大なるを化粧にて細く見する図

めの縁のふちふかく
窪(くぼ)く
こまかくとぼしきは
ちよいと椿油
すこし青く紫あり
よく拭(ぬぐ)ひて付(つく)べし
妙(めう)に治(なほ)るべし

○疱瘡(はうさう)のたまり跡(あと)を
治(ぢ)する傳
疱瘡(はうさう)のたまり穴(あな)ハいか
ほどふかくとも鶏卵(たまご)の
白(しろ)みを其穴(あな)へぬり置(おく)べし

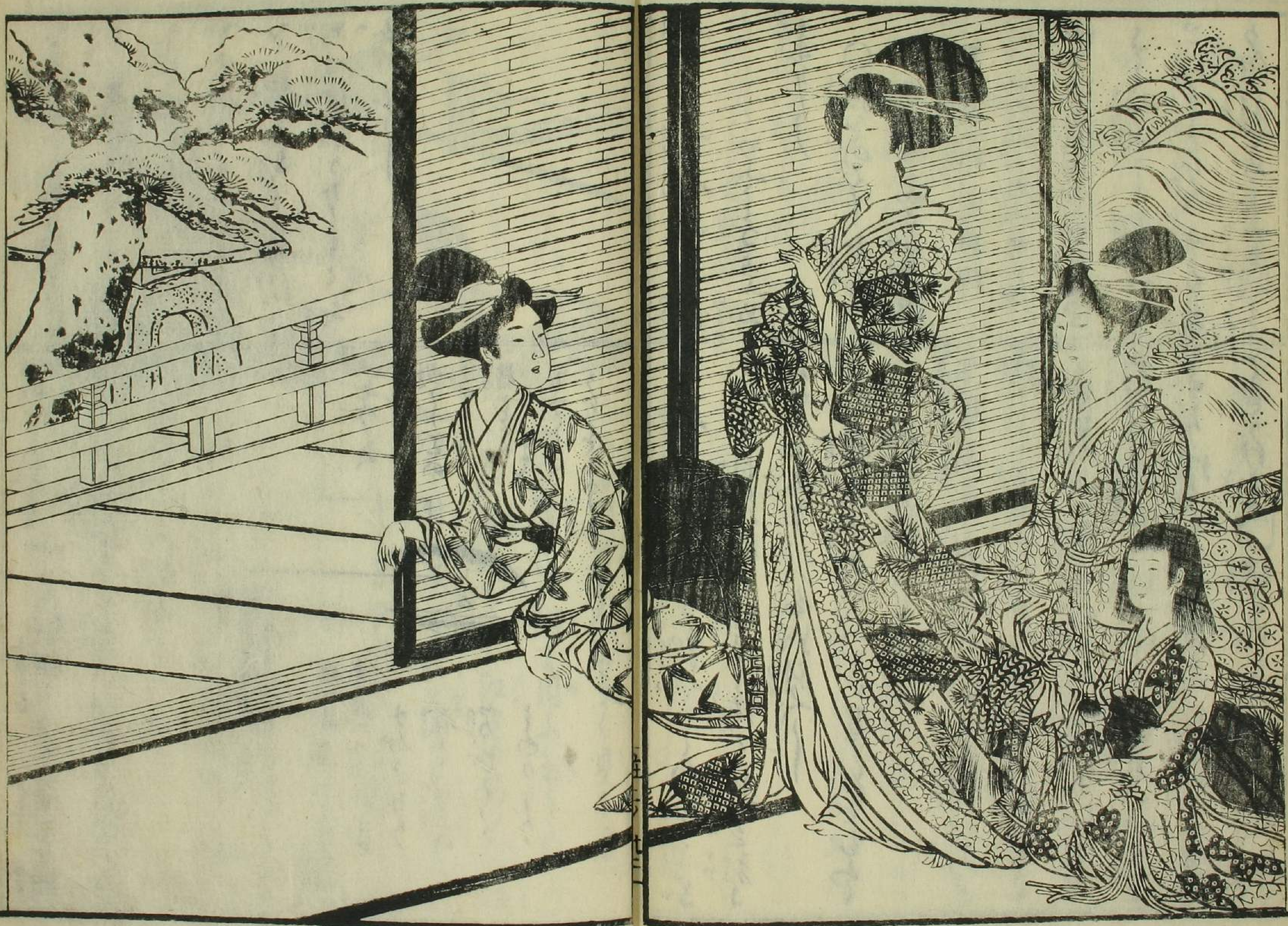
入(い)るべし百人(ひやくにん)に一人も治(なほ)
らざるといふことなし妙(めう)
薬(やく)なり

○皺(しわ)をのばし女の
ごく美しく顔の傳
ちよてい　大猪蹄
いのこのつめ
四つばかりを水にて能煮て
とろ〳〵と成して夜ねる時
ごろりとなりて顔を洗ひ
顔(かほ)によくぬり翌朝(よくあさ)洗ひ去(さる)

生(うま)れつき目(め)細(ほそ)く眼(め)塞(ふさ)ぎたるが如(ごと)
くなりて見え哀(あは)れなる目
を瞼(まぶた)瞼(まぶた)より鳥(う)ゑに付(つき)て窪(くぼ)
見ゆるがいかにもかりて見苦しく又目を
見ひらくにもうつむけるやうに見ゆるを
のばす目(め)に見せんとおもはゞ化粧(けしやう)
ふかり先(まづ)常(つね)のごとく化粧をなして後(のち)
瞼(まぶた)（目のうへの骨のふくらみ）のうへをうすくぼかし毛(げ)の
あたりを墨(すみ)にてくまどり紅(べに)のごとく
つくろひ紅(べに)をよくぬり
ところいおし雛(ひな)のごとくすれバ目(め)ハ

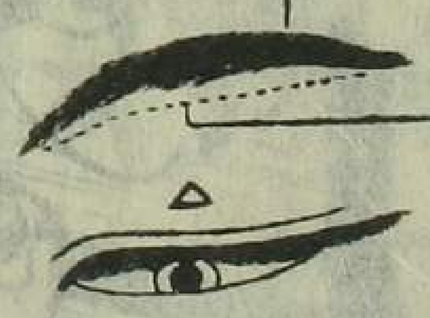
ひらくを遠ふ見るに格(かく)段よろしといふ
よく〳〵上手にすれバ瞼(まぶた)も眼(まなこ)も格(かく)別(べつ)宜(よろ)し
見(み)ゆるものなれバ少(すこ)し付(つけ)べし

○眉毛(まゆげ)と目(め)のあいだをせまきと広(ひろ)く
見(み)する傳
生(うま)れつき眉毛(まゆげ)と目(め)のあいだせまきハいかにも
窮屈(きうくつ)に見えて見ぐるしきものなり
にして見せんとおもはゞ眉毛のうへの方へおしてぞり
剃(そり)あげ眉毛(まゆげ)の跡(あと)をかくし眉毛(まゆげ)のおしよせ
こゝろへて眉毛(まゆげ)の中(なか)ほど墨(すみ)にて
まきうけ書(かく)べし　此目(このめ)ハ目(め)に八(はち)分
八目の見ゆる



と云ふてあるひとし
三夜またさてそめ給ふべく
かくべし半月の形か
かの様よくのびてまあ
を細くまし光沢を婦
物しあやうかるるし女
女のごとし

とやかく云ふ時は ふとれば眼かゝりて眉毛とれ
作為らしく見ゆ
よろづの拵へきれいにせんとするにはあらず
此図あるべし



○口の廣きをせまく見する傳
口の廣きへ頬は目ふるきよのかたち
それをのごとく紅をさしあるひは
紅を付ば口を太く濃くよ
人と唇ゐる口びるのずれもてまよ
みぐるしく見ゆるもの
口の廣きは下の口のごとく見ゆる
紅は紅粉を付唇の肉へ
白粉をおしつけてぬるべし
唇へ四分目ほど紅をさし
とるべく見ゆべし 又紅を唇の内
三分目ほどつけて七分目ほど

○聤耳総出る秘法
菖蒲の根

ふし　五倍子
女のかみに油付つる
ふしのこし
耳の中へふきいるべし

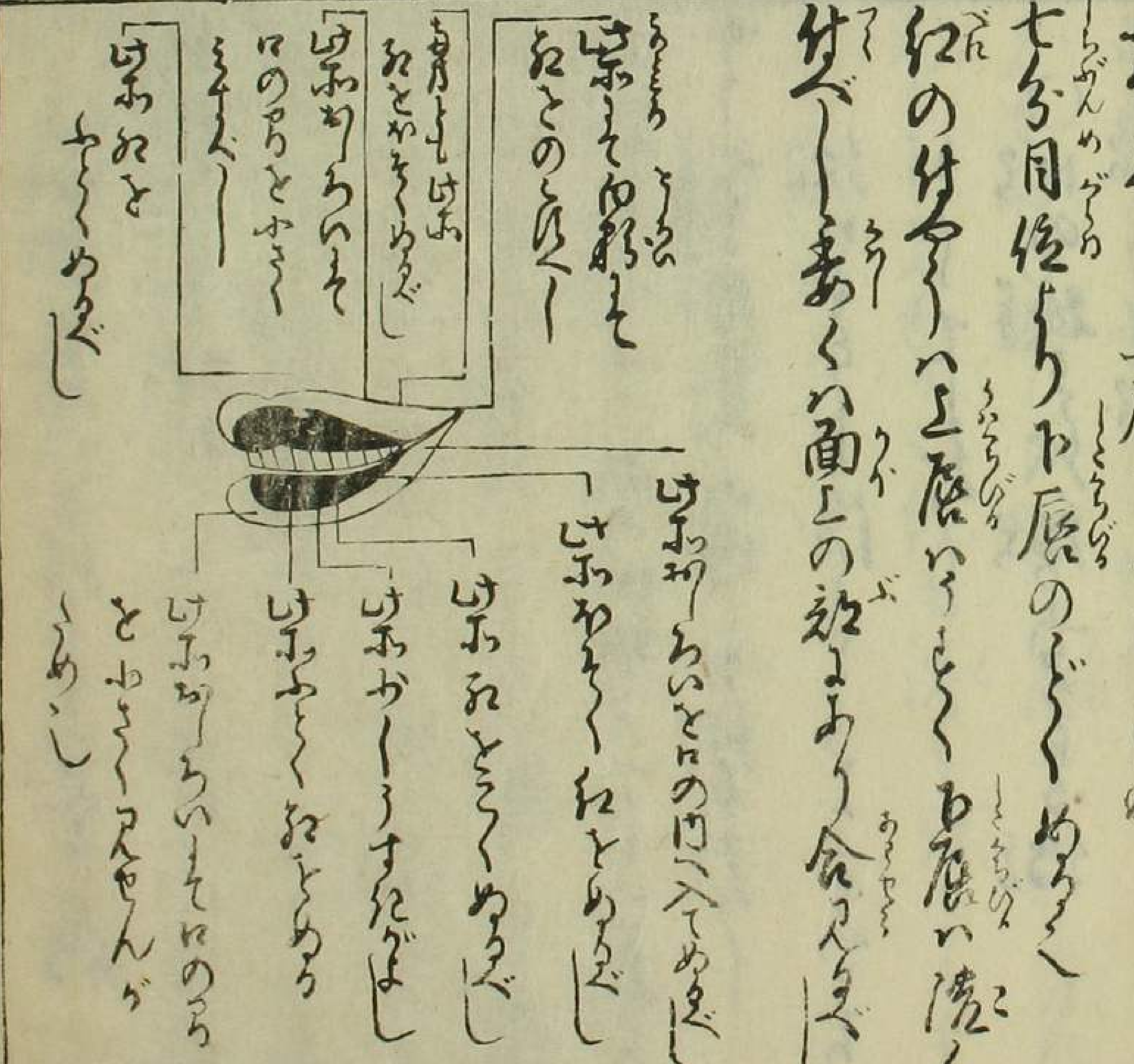
○又法
ふるわた　故綿
夜寝るとき入おきあぶらにて
黒焼にして粉にし
耳の中へふきいるべし

○又法
だいこん　生蘿蔔
おろしてしるを志ぼり紙を
ひねりてこよりとしその
先をしるに付て耳に入べし

○又法
せみのぬけがら　蟬脱
黒やきにし胡麻の油にて
とき穴入生姜にてひたし紙
のこよりにてつけ
耳に入べし

肉の方より紅をかし濃く付べし吻
も白粉をぬり紅をうすくつけて付くべし
此紅薬は其人の大小によるべしといへども
大かたは七歩のまへのこころ之まゝなり
白粉唇二歩ばかりに付紅を八分目
より付るに又白粉を一歩紅を九分目
より付るはそとい人の口は際ぬよるべし
紅の付やうは下唇は左の口わきより
ぬるとき中ほどへうすく付るは又其の
方は口わきはやく両方の吻そて紅を
かしのしたに右よりの本ぬりて

ふさぐべし上唇も又上の白粉をのぼし
七分目位より下唇のごとくぬるべく
紅の付やうは上唇は下とく下唇は濃く
付べし又かくは面上の顔にあり合べし



○耳鳴或ハ耳ふさがるを治する薬の伝

しほ　塩

あたゝめ枕にしてふすべし
冷れバ温めかへて用ゆべし

○虫の耳の中へ入たる時
治する薬の伝

ごまのあぶら　胡麻油

おしこみ耳の中へ入る
むし出るなり又耳の中
ふくおして治すに出るなし

○鼻赤くなりたるを
治する薬の伝

しほ　塩

ほうの鼻にふでをつけ
よくべし治する也

○何のできものにても
いたむと治する薬伝

いおう　硫黄

つけぎのさきにしめし
其所にぬり

○口唇のあつきを薄く見する伝
白粉をとく時に少しつけて口にぬり
入置紅の付やう口のあつきをせまく
見する伝の如く紅を付る吻ハおま
つも紅とあいのものにてぬりて少し
白粉を入べし紅ハ口にぬりのこし付る
中の七分ほどの内より付べし
紅ハ少し濃きがよろし
としてよろし

○口の狭きを広く見する伝
口の小さき人ハ紅の付やうしだい

又あつく小さき口ハ格好悪し口を広く
見せんと思ハバ紅を唇一ぱいに付れバ
大きく見ゆる紅も濃く付べし
外に伝なし

○短き顔を長く見する伝
顔の短き人ハ額の生際よりすこし
ぬいても剃りても短き顔と長
く見せ長き顔と同事の顔の如く
見ゆる化粧の仕様にして長き
顔と長く見ゆる紅の付ようハ顔
を目立ぬようにしてよくべし

手をあらひて冷水をもつてすゝぎ付べし

○口中一切の瘡腫物を治する薬の伝

ふし　五倍子

女のはぐろのやうにつけて
その付薬を治すべし

○咽中腫ふさがりたるを
治する薬の伝

なまだいこん　生蘿蔔

そのおろし汁をすべし

髭のもとゆひより上を本因にきれ
べきを元より悪しく残りたる
なれば、ためにきるべし云伝なり
さて小鬢より生ぎはの方へかけても
剃刀を入れ鬢の髪際へとどくまで
ておしおへてもみあげよし
次にうしろの後へ髭の小鬢より前
髪の生ぎはの内へ白粉をのばし
かけてよくいきのゝちに紙をあてる
化粧の部を仕がけしれ合せ
つけべし

その汁をそゝぐべし　口に含みて
漱ぐべし

○又法

しやうが　生姜

をすりおろし　すりつけは
て口にふくみてよし　又
おしのむもよし

○卒に舌腫痛むを
治する薬の伝

釜の下の墨　まぜまぜて
酒にてときつくべし

さて生際より白粉を仕立より仕上げ
め小鬢より生ぎはの方へかけ前の
方をとゝのへて化粧をすべし
前の方をとゝのへて化粧をすべしまたは
額の上より紙をあてゝこれをとる
後のあたりへ白粉を合せ付べし
次の条下に出せり
次に耳の後の方へ白粉をつけてのばし
耳のうしろより耳のつぶの下へかけ衿の
背へかけて咽首筋へむけて白粉を濃く
ぬるべし　是頸の方を濃くぬりて首筋

○歯齦より血出るを治す妙薬の伝

なべずみ　百草霜
なべのそこのすみなり
すりつけるべし

○又法
ふし　五倍子
女のはぐろ付るふしなり
黒やきにして付れば妙なり
とおるまの方よし

○歯のいたむを治す妙伝

圓顔を細長く見せる化粧の図

かべつち　壁土
粉にして塩と等分に合
よく炒て右の歯いたむ
時は右の鼻へ吹入左の
歯いたむ時は左の鼻の
中へ吹入てよし

○又法
ごま　胡麻　去皮
水にて煎じ○のごとし呑ど
口にふくみ歯を嗽ぐべし

○虫くひ歯のいたむを治すと

のごとくなる化粧の仕やう所乃
白粉より首筋化粧する法がよし眉は
おとし額をよくつくるべし額をとる其
くる顔は眉形おとしつくれば顔の方よ
て三角にみへてかえりてはうつり
ことの書さは図して知るべし

○額のなりを能く見よる伝
額際の生よりの額はるい額額際と
眉とのなかをよくみて抜ぬよう
幽さんさい繁生菜を用ひて額際を

眉の伝

もぐさ　艾

火をもやさず其烟を鼻の中へ入ほどよく煙をのみ吐出すべしよく治る

○又法

すぎのやに　松脂

ねりて虫歯の穴へ入べし　檜脂

又ひのきのやにもよし

○又法

こせう　胡椒　一味

せよべし。又眉をそらひまで額のさがりをつくへんときは化粧の伝ハまんべんなく化粧せんとおもふ所へ白粉をぬりてよくよく顔の上へ塗りかくし置てけしやうの白粉とのり出しまじひ一ぺんぬりよそ額のそれよく生際より上の方へ白粉をのこし其額のはしをよくよくぬぐひ去りて後常のごとく白粉をとき生際より上の方ハ分りよく其下ハつねのごとくけしやうすべし是を目もとに[illegible]

あつき湯にひたしよくはとらけてもみてつけてよし

○又法

いぬざんせう　山椒根

をねんじてせんじてつけてよし

○又法

ちりめん　芥菜

のしてけし粉にしてつけべし

手へつけよし

○倒睫(さかまつげ)をぬくと治る

眉の伝

めでたくなれバ額の左右へかけて額は其際眉ハ額の所ハ白粉をうすくぬるべし是にこまかくぬりて額のうへ長く額も白粉ハ額のかみよく見へ長く額も白粉をぬるべし眉ハおしまづ額に近づけて眉のきれへ額とむすびて少しくつけ眉ハお額の小額よりてまくつのさきを先おくへとりして額の額おのづからわかりてよくなるなり

化粧ハ次の図を見て考ふべし

毛ぬきにて毛をぬくべき
枕血が出る人の眼よ
り風がさはりて毛が
抜るべし
○額よりうき毛出来
て見ぐるしき顔容
ときは次の伝
家鴨の焼れおいの汁
とうのあくにてとりて入
て其毛を洗のもよし
化粧伝巻之上終

額の生ぎは短く見ゆる化粧の図